
～ソロモン～ 動物の声が分かる男

伊之口浩作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ソロモン」 動物の声が分かる男

【Nコード】

N1942A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

俺の名は松本。ごく普通の男だが、特異な能力を持つ。それは「ソロモン」。俺には動物の声が聞けるのだ。

第一話 ゴールデンレトリバー ジョン 四歳（前書き）

一気に書き上げた作品です。
結構駄作です。

面白いと思ったら、評価と感想の方、よろしくお願いします>

第一話 ゴールデンレトリバー ジョン

四歳

俺は公園のベンチで本を読んでいた。本といっても、重苦しいタイトルの本ではない、ただのマンガ雑誌だ。今日発売で今し方買ってきたものだ。

マンガが一区切りつき、ふと顔を上げた。すると、目の前に若い男女数人と、赤い首輪のゴールデンレトリバーがいた。

しまった。と、おれは思った。何故なら俺は、目の前に動物が居ると、その動物の声が聞こえてくる。しかもその間、他の声は全く聞こえない、いや、そのほかの感覚全てが消え去る。

まずい。そう思い、手にしたマンガを放り出し、ベンチから立ち上がって逃げ出そうとした。しかし、俺の奇妙な能力は、俺が走り出す前に、その本性を露わにした。

フツ。今日は我が主との散歩か。

それにしても、今日はいい天気だ。心なしか、我が主も楽しそうだ。

ん。「お座り」とな。フツ。この私にしてみれば極簡単なことだ。ほれ、こうすれば良からう。

なんだ？「そのまま、待て」とな。いいだろう、我が主が何を成すかは知らぬが、私はその命令に従うのみだ。

ん？なにをしている……？おお！それは私の大好物のビーフジャーキーじゃないか！

なるほどそうか、分かったぞ、我が主の命令の真意が！

我が主は、私の目の前でビーフジャーキーをちらつかせ、私がどれくらい耐えられるかを試すおつもりだな。

いいだろう。我が屈強な精神！必ずや主のご期待に添えましようぞ！

ん？今日はいつもと様子が違うな。私の鼻の上にビーフジャー

キーを……。おい、何をするのだ？ 一枚、二枚、三枚とビーフジヤーカーを私の鼻の上に……。

主のしていることがさっぱり分かん。

ん？ おお、それは主の言葉で言う「びでおてーぷ」なるものだ。先日、私の芸の内容を録画しようと、それを使ったことは今でも鮮明に覚えている。

お。鼻の上のジャーカーが四枚、五枚、六枚。段々増えている。それにしても、ジャーカーの放つ香りはとてもかぐわしい。主の隣の妙な髪の色の方が女よりも良い香りだ。

ん？ こんどは、五枚一気に乗ってきたぞ。

はあ。一体どのくらいまで待ってればいいのだ？ 朝から何も食べていないから、益々食べたくなってきたぞ。今すぐにでも、ジャーカーで腹を満たしたい。

ん？ いつの間にかジャーカーが十六枚に……。

はあ。腹が減った。早く食べたい。これは、一種の拷問か。何故そんな事をする。これまで、私は主の命令に従い続けてきたではないか！ 流石に、初めてあった日は主の存在に恐れを成し、噛みついたり飛びかかったりしたが、それでも今では従順しているではないか！ その行いになんの意味がある。

はっ、そうか、わかった。我が主は『人間』だ。『人間』は我ら『犬』よりも遙かに高等で思慮深い生き物。ははは。私はどれほど下等で下らない問題に悩まされていたのだ。人間のすることは、我ら犬のすることよりも遙かに意味のある行い！ それを私が完全に理解出来るものか！ 私は主の命令に従っていればいいのだ。主の命令に疑問を抱くなんて、私は犬失格だな。

それにしても、私の鼻の上がずいぶん重たくなってきた。

ん。主が何か言っている。

「三十枚突破！！」

三十枚？ ああ、ジャーカーのことだな。いやしかし驚いたな。この世にこんなに沢山のジャーカーがあるとは。

む！？ しまった！ よだれが！ まずい。主の前でこんな醜態を晒すとは！

止めねば！ このよだれを止めなければ！ 主の信頼を裏切るような真似だけはつつつ！

ああ、止まらない。何故だ、何故止まらない！ この香しいジャーキーの香りのせいだな。ならば、このジャーキーをここから排除してしまえば……。

ダメだ！ そんな事は許されない。主の命令は絶対だ。待ち続けなければ！

ああ！ 腹が！ 今、腹が鳴った！ 腹の空いている証拠だ！

ああ、ジャーキーが欲しい。今すぐにでも食べたい。私の腹が鳴って懇願している！

主！ 早くその命令を解除してくれ！ 私はこれまでアナタに従順だった。これからもそのつもりだ！

頼む！ 早く食べさせてくれ！ ゲラゲラ笑ってないで早く！ 食べさせてくれたら、この先何でもする！「お座り」も「伏せ」も、「ちんちん」だってやってみせる！だから早く！

「よし。四十枚目！」

ああああ！早くうううううううう！！！！！！

「おわっ！ 崩れた！」

今だ！ 今しかない！ 主！ 済まないが、ジャーキーは食べさせて貰う！お叱りは覚悟している！ だが！ それは食べ終わった後にしてくれ！

うおおおおおおお！！！！！！ じゃーーーーーきーーーー！！！！！！！！！！

ガツガツ！ バクバク！ むしゃむしゃ！

旨い！ 旨い！ 旨すぎるぞ！

うおおおおおおお！！！！！！ ジャーキーばんざああああああああいいいいいい！！！！！！

ぐ。またか。またも動物の声を聞いていたようだ。

どうやら、目の前のレトリバーのようだ。

ふう、しかし。あの飼い主は自分の犬の姿を撮ってどうするつもりなのか。ああ、そうか。先週の「ぼちたま」で、ペットのおもしろビデオ募集とかいう企画をやっていたな。あれに応募するつもりだな。

まあ、いいや。俺は明日からも、いつもと変わらぬ毎日過ごすだけ……。

第一話 ゴールデンレトリバー ジョン

四歳（後書き）

このお話。まだまだ続きます。

第二話 三毛猫 野良

二歳（前書き）

動物の声が聞こえたら、多分こんなこと言ってるんですかね？

公園での一件には参った。

ベンチの側だったのがせめてもの救いだ。意識を失った直後、自分の真後ろに有ったベンチに倒れたお陰で怪しまれずに済んだ。あの公園には寝てるサラリーマンが多いからだ。

さて、急がなくては。これから友人の家に行かなくては。

友人の家に行くには商店街を通っていくのが手っ取り早い。

あと数十メートルほどだな。

ん？ あれは。しまった、路地の影に猫が！
くそう。このままでは。

松本の能力は、松本の意識を消し去り、その本性を現した。

へっへ。今日の獲物は鰺だな。「魚本」は青魚が旨い。

ああ、でも、一尾2500円の真鯛も捨てがたい。鯛好きなんだよなあ。

うゝむ、悩むなあ。鯛にしようか、鰺にすべきか。

くそつ。あの店主め、なかなか頭がキレると見た。チクショウ、鰺と鯛を一目で確認出来るポジションに立っていやがる。どっちかを盗みに行ったとしても、確実に見付かる。しかも、あの店主はあのポジションを死守していやがる。客は全部嫁に任せて、あそこからほとんど動かないときたもんだ。

えゝい、舐めやがって。

ん。電話。ちっ、嫁が出た。

いや、これはチャンスだ。こうなっしまえば店主が店番をせざるを得ない。ふふ、貰ったぞ。

「はいはい、アサリですね」

動いた、今だ！

「500円です」

貰ったああ！

「毎度！」

行ける！

「ああ。猫ちゃんだあ！ かゝわいい」

何！ 子供！

しまった、これは計算外だ。まずい抱き上げられた、身動きがとれん。

「ママ、見てみて」

くそう、放せ。くそつ、店主がああポジションに。

「あらあら。まみちゃんはなしてあげましょうね」

そうだ、今すぐそうしろ！

ああ、嫁が帰って来やがった。これでは盗めない。

くそう。放せ。

「痛いー」

許せ、軽く引っ掻いただけだから深くはない。一週間で治る。それよりも鯛だ。

「大丈夫？」

よし！ 嫁が女の子に近付いたぞ。これで店の守りは手薄だ。今しかない。

店主め、俺に気付いたな！ 仕方有るまい、店の前で騒ぎを起こしたのだからな。しかし、気付いたからどうだというのだ、俺は行くぞ！

「あつ。このやろ」

ふはははは。遅い遅い遅い！ この鯛は俺の物だ。

ん？ 後ろから他の猫の群が……？ はっ、アイツ等俺を囷にしないで。俺は踊らされていたのか。

「捕まえたぞ、この泥棒猫め！」

しまった！ 捕まった！ 放せ！ オイ！

「ああ、仲間がいたのか！このお、ゆるさんぞ！」

待て！ 違う！ アレは俺とは関係ない！

や、やめろおおおおお！

はっ。またか。また、動物の声が聞こえた。

うっ、俺の周りに人だかりが。まずい、今すぐここから立ち去る
う。

しかし、この力にも困ったものだ。

第二話 三毛猫 野良

二歳（後書き）

この動物について書いて欲しい！という要望があったら、メッセージを下さい。

第三話 手乗り文鳥 ピッチ 四ヶ月（前書き）

この話を書くのが楽しくなってきました。
まじで筆が進むんですよ。

第三話 手乗り文鳥 ピッチ 四ヶ月

いやしかし、商店街の一件には参った。多くの通行人に見られてしまったからだ。危うく、警察に職質（職務質問）をうける所だった。

さて、商店街から徒歩十分。『ハイム小泉』が俺の友人の家だ。

「俺だ。松本だ」

「おお、まっちゃん。入りな」

友人の名は谷本。高校からの友人だ。

それにしても、相変わらず汚い部屋だ。

「今、お茶を入れるよ」

「すまない」

俺は谷本の部屋の中を見渡した。それにしても汚い。なんだかきな臭い。

一間の部屋には家財道具一式が置かれていた。テレビ、タンス、ベッド、パソコン、鳥かご……。

鳥かごと。まずい。これでは俺の奇妙な力が。

「谷本！ お前、いつの間にこんな鳥かごを……。前来たときは無かっただろう！」

俺の語気は自然と強くなっていた。

谷本はそんな俺に少し驚いたようだ。振り返るなり固まってしまっている。

「いや、それは、二週間前に……」

「何を飼ってる。言え！」

「て、手乗り文鳥」

くそつ、早くここから逃げなくては。

「まっちゃん。何処行くんだよ」

気のせいかな？ 谷本の声が霞む。
しまった！ またあの力が！？

ピピツ。ぼくの名まえは『ピッチ』だって。

ははは、かわいい名まえ。

それにしても、ぼくのかいぬしのおともだちのお兄ちゃん、なんだか、ぼくのおうちをみるなりおこっちゃった。ぼく、なにかわるいことしたかなあ？ それにこんどはたおれちゃった。ぼくのせいかなあ？

まあ、いいや。そんなことより、ごはんごはん。

ああっ、まただ……。

ぼくのかいぬしのお兄ちゃん、いつもごはんのカラーを取ってくれてない……。これがあるとまずいの……。ぼくのこときらいなの……？

まあ、いいや。ごはんがないならお水のも。

きやあ、なにこれ。お水くさい！　なんでまいにちかえてくれないの……？　こんなお水のんだらおなかこわしちゃうよ……。ぼくのこときらいなの……？

きらわれたくないなあ。はじめてあったときは『かわいい』って言うてくれたのに……。あれはウソだったの……？

ぼくのおうち、なんだかきたないなあ……。あっちこっちのぼくのうんちがおっこちてる。たまにでいいからおそうじしてほしい。おにいちゃんのおへやもきたないなあ。おにいちゃんのごはんのたべかすがいっぱいそのまんまになって、ちっちゃい虫がわいてる……。こんなおへやにいたらびょうきになっちゃうよ。

おにいちゃん、おともだちのおにいちゃんの名まえをよんでる。あのお兄ちゃんだいじょうぶかなあ？　ぼくのせいだったらどうしよう……。お兄ちゃん、だいじょうぶ？

「まっちゃん。おい。まっちゃん！」

ん。谷本が俺の事を……。

しまった。またあの力が現れたらしい。

「大丈夫かよ？ いきなり倒れて」

くそ。この力、ハッキリ言って迷惑そのものだ。動物が近くにいと、すぐに目覚めてしまう。やっかいだ。

それにしても。この男、文鳥の世話をしてないようだな。あのきな臭さはそのせいだ。ここは一つ、あの文鳥の為にも一つ注意してやらなければ。

「谷本！ お前、文鳥の世話をしてるのか！ 可哀想だろ！」

「あつ、そついやあ、ここのところ忙しくてあまりやってなかった。すまん」

谷本め、俺に言われて鳥がこの掃除を始めたな。これでは、飼い主失格……だ……。

おともだちのお兄ちゃん。ありがとう。

またか。しかし、今回は短かったな。

まあいいか。とりあえず、一つの小さな命を救えたのだから。ふふ、今日は良いことをした。

第三話 手乗り文鳥 ピッチ 四ヶ月（後書き）

今回はすっかりまとめてみました。

ひらがなばっかでよみにくくてごめんね。

『ハイム小泉』の名は、その時丁度、郵政民営化についてやってたからです。

第四話 チャボ

ダツチ

セキセイインコ

有り ハシブトガ

簡単なキャラクター紹介をします。 チャボのおすぎ（八歳）：中年のおっさんキャラです。嫁の尻にしかれてます。 チャボのめん子（八歳）：よく喋るおばさんキャラです。図々しいです。 ダツチ（ウサギ）のぴょん吉（五歳）：人間であれば三十後半で独身です。タチが悪いです。 インコ（六ヶ月）：小生意気なガキです。前部のピツチが少し憎たらしくなった感じです。 ハシブトガラスの黒丸（二歳）：無責任で適当なチンピラキャラです。カラスの見た目そのまんまです。

俺は、谷本と一緒に部屋の掃除をすることにした。谷本にも文鳥にも好ましくない位汚かったからだ。

三時間ほどで掃除は終わった。四五リットルのゴミ袋が一〇個は必要になった。

掃除の途中意識を無くし、文鳥の声が聞こえたりもした。意識を失う度に、谷本に小突かれたりもした。

俺は谷本に別れを告げた。

谷本が俺を呼び出した訳が気になったが、きっと、大した用件ではないだろう。

俺に妙な力が宿ったのはいつだろうと考えると、小学校5年生が最古の記憶だ。

当時、飼育委員だった俺は、毎日のようにウサギとニワトリの世話をしていた。

しかし、あるとき意識を失い、つがいのニワトリとウサギの言い争いが聞こえた気がする。

松本は、昔の記憶を思い出すことにした。

めん子：ほんつともう、だらしないねえアンタは！

おすぎ：うるさいなあ、お前は。

めん子：何よ。いつも寝てるか食べてるくせに！

おすぎ：俺たちはニワトリだぞ。寝るか食べるかしかないだろう

めん子：『寝るか食べるか』！ 聞いて呆れるね！ 低血圧でカラ

スの鳴き声で起きるくせに！ ニワトリっていいたいなら、朝日よ

り早く起きて、『コケコッコー』って鳴いてみな！

おすぎ：はいはい、わかったわかった。

めん子：それにしても、なんて意地汚いトリだよ。飼育係の人が毎

日エサをくれるのに、なんで外に生えてる雑草なんか食べるんだい！？ あたしやあみつともなくて情けなくなるよ！

おすぎ：仕方ないだろう。あのエサはパサパサしてて不味いんだ。

めん子：うるさい！そんなところをカラスの黒丸に見られたらどうする気だい！？ ご近所のいい笑い物だよ！

ぴよん吉：おおい！ 夫婦ゲンカならよそでやれ。

インコ：そうだ、そうだ。よそでやれ。

めん子：黙りな。いい年して独り身のウサギめ！

ぴよん吉：それを言うな！学校に金が無いから、メスウサギが来ないんだ！

めん子：そっちの方が良いね！ 毎日のように交尾されたんじゃ、小学生に毒だよ！ 第一、そんなモンを見せつけられたらたまないよ！

ぴよん吉：そっちが大分ご無沙汰だからって、八つ当たりすんな！

おすぎのダンナ、このトリになんか言ってやれ！

おすぎ：すまん。

ぴよん吉：誤ってどうすんだよ！

インコ：ひとりみ、ひとりみ。淋しいウサギは死んじまえ。

ぴよん吉：黙れ！ 噛みつくぞ！ コラ！

インコ：はねるだけのでっばがいきがるな。

ぴよん吉：このやる……。

インコ：ひとりみでっば

ぴよん吉：もう我慢出来ねえ！ 噛みつく！！

黒丸：カカカ。また一段と賑やかだな、この小屋は。

めん子：黒丸。アンタ何しに来たんだい！？

黒丸：冷やかしさ。

カカカ。おすぎのダンナ、今日の喰いっぷりは、また一段と豪快だったな。

おすぎ：見てたのか……。

黒丸：おう。見てたも何も、すっかり見届けさせて貰ったぜ。手始

めに、隣の学校の二ワトリ共にタレ込んでやったぜ。

めん子：ああ、さいあく。もう、おしまいだ！

黒丸：カカカ。アイツ等飛び回って喜んでたぜ。ついでに、伝書鳩とツバメ共にもタレ込んだからよ、明日にや全国区だ。

ぴょん吉：おい、黒！『山王子どもランド』の『ラビーちゃん』はどうしてた。

黒丸：ああ、あの白ウサギね。カカカ。よく聞け独り身出っ歯。生まれたての仔ウサギの世話をしたぜ。

ぴょん吉：うわあああ、もうイヤだ。俺の人生もう終わりだ！

ガリガリガリガリ

めん子：おい、ぴょん吉。オリをかじるんじゃないよ。また、前歯を折るよ。

インコ：はぁ折れ、ひとりみー。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ……。

確か、あれが俺の最古の経験だ。

あのときは変人扱いされ、精神科に連れて行かされた覚えがある。

俺はあのときを境に飼育委員の仕事をしなくなり、先生や両親に散々叱られた記憶がある。

もう、日が暮れかけてきたな。早く家に帰ろう。

第四話 チャボ

ダツチ

セキセイインコ

有り ハシブトザ

この話はtemsoさんに原案を頂きました。これを小説と言って
良いかどうか悩み所ですが、笑って頂けたなら嬉しいです。ご感想、
ご意見、ご要望などお待ちします。

第五話 フェレット ミュウたん 一才半（前書き）

申し訳有りません、ほったからしにしました。

「一体何ヶ月更新してないんじゃ、コラ！」とお叱りを受ける覚悟も出来ております。しかも、今回は動物の台詞がやたらとごちゃごちゃし、これまでに無く見にくく（醜く）なっています。

言い訳はしません。本当に申し訳御座いません。――<

第五話 フェレット ミュウたん 一才半

俺は人気のない夜道を歩いてた。既に夜も更け、冷たい夜風に吹かれる。恐らく谷本の部屋での一件が原因であろつ、右膝が少し痛い。

歩くうち、昼間の公園があつた。その夜道同様人氣が無く、ツジの植え込みの向こう側は暗く淀んでいる。

園内の様子を軽く一瞥し、そこを過ぎ去ろつとした。すると、俺を呼び止める声がどこからか聞こえる。

「松本君……」

声は女性のものでつた。はて、この声は誰の声だろつ。全くと言つていいほど聞き覚えがない。

逡巡する俺をよそに、その声は尚も俺の鼓膜を揺すぶる。

「松本君だよね？」

二度目の呼びかけで振り返る。するとそこには、一人の女性が佇んでいた。しかし、公園の街灯の逆光からか、彼女の姿は漠然としか捉えられなかつた。身長は、俺より少し低い位だろつか。それくらいしか解らない。

「ワタシの事、覚えてるよね？ ホラ、よく保健室まで付き添つてたじゃん」

誰だ。そもそも保健室つて何だ。記憶を遡るが、残念なことになかなか思い出せない。

必死に思い出す努力をしてるうち、彼女は語勢を強めて問いかけた。

「ワタシだよ。渡部朝希」

彼女、いや、渡部さんの一言は、俺の想起に止めを刺した。

「渡部さん！？ ひゃあ、久しぶり！」

「思い出してくれた？」

渡部さんは満面の笑みだ。そして、それを見ている俺の顔も、自

然とほころぶ。

彼女とこうして口を利くのは、もうかれこれ十年以上久しい。彼女は俺と同じ小学校で、五年生と六年生の時のクラスメイトでもあった。当時、クラス委員長でもあった彼女は、飼育小屋である例の妙な能力で難儀する俺を、ことある事に保健室に連れて行ってくれたのだ。

しかし、渡部さんは変わった。もちろんの事だが、顔からあどけなさが無くなり、顔つきが大人びている。どこからどう見ても『爽やか系お姉さん』である。昔の地味な面影は、一切消えて無くなっている。

（女って……、こういう意味で怖いな……）

俺が心の中でしみじみ呟いていると、渡部さんがこう切り出した「そうだっ！　少しウチに寄ってかない？」

少し躊躇する。しかし、この後数分に渡ってしつこく誘われると、強ち悪い気もしない。この後の用事もない俺は、『お茶くらいなら』と思い、彼女の家を訪れる事にした。

公園から徒歩三分。とあるデザイナーズマンションの一室が、今の彼女の住まいだ。

「どうぞ。汚い所だけど」

二階の一室に通される。やはり女性の部屋という物は、いつの時代も男を引きつける。しかし、あくまでお茶、と自分に言い聞かせ、部屋の奥へと向かった。

リビングに行くと、あまり見たくないものを見てしまった。リビングの奥、テレビの隣に動物用のゲージがあったのだ。

「まあ、座って待ってて」

と、彼女に言われた。一礼してから腰を下ろすと、直ぐさま振り向いてゲージに目をやる。そこには、小さなハンモックの上で、真っ白なフェレットが腹を見せて寝息を立てていた。しかも、鼻ちようちん付きだ。

(ふう、助かった……)

ほっと胸を撫で下ろす。直後、彼女は紅茶とクッキーを出し、
「ねえ、これまでどうしてた？」

と訊いてきた。

「うん、結構色々あったよ」

そう言つて紅茶を頂く。その時だった、例の奇異な能力は、不幸にもその陰を落とす。

(しまった……)

そう思つたとき、俺の視界はテーブルでいっぱいになっていた。

はあよく寝たあ。今日もおゝなんか退屈う。

つてえかゝあの女ウザイっ！ 今朝もおゝ、ミユウたんおはよー
とこかつてえゝ近づいて来たんだけどおゝ、マジきもゝ。それでな
くてもキモイのにいゝ、お前何食つてんだつてくらい口、臭うしい
ゝ。足もおゝ、超お臭うんだけどおゝ。なんかあゝ近づくなくてや
つう？

なんかあゝ、また男連れてきたつて奴う？ きやつきやつ！ お
前それで何人目だよ。いくら連れてきてもおゝ、無駄だつつのつ
！ つうかあゝ、またその男にいゝ、ネズミなんたら勧誘する気
だろおゝ。魂胆、見え見えつてやつうゝ。マジ何人目？ つうかあ
ゝ、フツーに考えてえゝ、『ツキ指十本』つてありえねーしいゝ。
マジ話甘過ぎいゝ。まあ、アンタも前の男にそそのかされて入っち
やっただからあゝ、マジ必死になるの当然つてヤツうゝ。

つてか、水替える！ バカあゝ！ メシもマジいゝしいゝ。自分
だけ男にゴチになつてんじゃねえ！ ウザキモっ！ マジウザっ！
それにさあゝ、アンタの本職何？ キヤバ嬢だつたっけ？ 仕事
でも男ダメして、副業でもダメす訳えゝ、かなりありえないんだけ
どおゝ。腹黒すぎいゝ。ウチつてえゝ、キヤバクラの常連さんにお
ねだりして貰つたんだろ？ 散々『カワイイ』連発した割には、
三日で飽きてるし。マジあり得ない！

つか、アンタ実は腹出てんだろ？　いつもお菓子ばつか喰ってんしさあゝ、体重何キロだよ？　きゃっきゃ！　実は七〇キロ一歩手前？　昨日オフロでさんさん愚痴ってたの聞いてたしいゝ。マジ、いい気味ってやつうゝ。

あゝ、つか、マジ脱走したいし。普通に限界ギリギリだしゝ、もう耐えらんないっ！　あの女キモ過ぎ！　デブのキャバ嬢ってあり得ないしいゝ。

ああゝ、もう嫌っ！　つか、あいつら邪魔！　マジ　ホワイトキツクうゝ。

眠っ。寝よ。

ゆっくりと意識が戻る。少し滲んだ視界の先には、渡部さんの怪訝な顔があつた。

「まだ治ってないの？　それ」

「うん。でも、大分慣れてる」

「あ、そう」

渡部さんはいささか納得した様子だった。

二人の空気が気まずくなる。でも、俺はあまり気にしていなかった。

しばらくして、彼女が思いだしたように口を開けた。

「ねえ、松本君。人助けしない？」

「人助け？」

「そう、人助け。ちょっとね、組合員になつて欲しいんだ。でもね、お金が掛かるのは入会の時だけで、それからは何もなくて平気」「ふーん」

その時、俺はもしかと思った。先程のフェレットの言葉が事実だとしたら……。

「まず、最初に一万円払うの。そしたら、今度は松本君が、また新しく組合員を見つけて入会させるの。その時、新しい組合員が一万円払って、その中の五割が松本君の収入。それで、今度は松本君が

入会させた人が、また新しく組合員を作ると、今度はその人から三千円貰えるの。いい話でしょ？」

やっぱり。これは紛れもない、『マルチ商法』というヤツだ。別名『ネズミ講』。ネズミが殖えていくように組合員を増やし、その頂点の人間に金が入る、というシステムなのだが、必ず崩壊するし、何より犯罪みたいな物だ。

「でね、松本君が新しい組合員を増やせば増やすほど、松本君は儲かるの。上手く行けば、『ツキ指十本』だよ」

彼女は右手の人差し指を立て、左手の親指と人差し指でまるを作って見せた。

引つかかるものか。あれほど熱心に家に誘ったのは、これにはめるためだったのだ。気の毒だが、これは人助けではなく、単なる悪質商法の助長に過ぎない。んな物に引つかかる程、俺は愚鈍ではない。

「いや、やめとく。俺、今本当に金が無くてさ。そういうゆとりが無いんだ」

あえて『ごめん』だの『悪い』などとは言わなかった。別に謝ることでは無かったからだ。むしろ、これで謝辞を述べる事は、犯罪者予備軍の人間に屈服した事を意味する。

「じゃあ、俺帰る。あと、生き物は責任持って飼いな」

俺はそう言つて席を立った。彼女はきよとした眼でこちらを見ているが、知ったことではない。

靴を履き玄関を開け外に出る。夜風はまだ冷たい。当たり前か。

「ふう。女って、本っ当に怖いなあ」

そう吐き捨て、俺は帰路に就いた。

第五話 フェレット ミュウたん 一才半（後書き）

ネタ提供：愁真あさぎ様

貴重なネタのご提供。誠にありがとうございました。少し
いじくり回し過ぎました。愁真さんのネタのイメージを、甚だしく
壊してしまいましたらすみません>（――）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942a/>

～ ソロモン ～ 動物の声が分かる男

2010年10月8日15時49分発行